曲目解説

モーツァルトの交響曲第38番は、「プラーハ」の名を持つがこれは他の重要なニ長調の交響曲第35番と区別する為のもので彼自身の命名ではない。(1786年作曲。1786年12月19日プラーハにて初演)「プラーハ」が作曲された当時、モーツァルトは大変に経済的困窮にあえいでいて、『フィガロの結婚』などの成功をみたプラーハでの演奏をもくろんでこの交響曲が作曲された訳である。

曲全体は、後の三大交響曲に内面的な充実度では劣るものの、メロディー自体に含まれる、アレグロ楽章での勢いやアンダンテ部分での流麗さはこちらの交響曲の方が勝ると思われる。作曲の癖から言えば三大交響曲よりはるかにモーツァルト的である。メロディカルであり、軽快であるわけだ。

ここで一つ特筆したいのは、「プラーハ」で見せたモーツァルトの管弦楽法である。先に書いたようにこの交響曲はプラーハでの演奏の為に書かれたものである。初演の翌日は当地で好評であった『フィガロの結婚』を上演している。このことからもプラーハの楽団は充分に当時のフルオーケストラ、つまり二管編成を組めたのである。がモーツァルトはあえて「プラーハ」をクラリネットぬきで書いている。それまでの多くの交響曲のようにそれぞれのオーケストラの編成に合わせたのでなく、「プラーハ」の性格かモーツァルト自身の趣向かはわからないが、あえてクラリネットを除いたのである。(フルートについてはそれほど好きでないと告白しているが。)がしかし、モーツァルトは、木管楽器の音にホルンを混ぜ合わせながら、決して楽器を単独でばかり重用せずに巧みにブレンドさせながら、クラリネットを欠くという編成上の言わば欠陥を補いつつ、音色をより豊かに演出させている。和声上の位置を変えたり、楽器の本数を変えたりしてブレンドの仕方にも、25分たらずの曲にもかかわらず、マンネリを避けた工夫がされているところも心にくいかぎりである。モーツァルトの天才の部分と言うべきだろうか。

19世紀中葉の西欧に於ける屈指の指揮者ハンス・フォン・ビュローをして、ベートーヴェンの不滅の9つの交響曲に続く第10交響曲と言わしめたのがこのブラームスの交響曲第1番である。(1876年、作曲完了。1876年11月4日、カールスルーエ宮廷劇場に於て初演。)がしかし、ベートーヴェンの交響曲第9番からブラームスの交響曲第一番までは、50年余の年月を経ており、その間にはドイツ・ロマン派を初めとする数々の交響曲、例えばベルリオーズの「幻想交響曲」やシューマンの交響曲などがあり、「第10番」の命名はブラームスにとってはこれ以上の讃辞はないが、その他の交響曲を無視した言葉ということができる。つまりは、当時すでに古典的存在になっていたウィーン古典派の一員としてのベートーヴェンに続くという意味で、ブラームスをその古典派の後継者と見なした一言であったのである。確かに形式の重視や絶対音楽の位置付けからすれば、ブラームスは古典派の後継者であるかも知れないが、特に管楽器のオーケストレーションはロマン派的であり、古典派でよく見られる二、三の木管を合わせてかもし出すブレンドした音色を作用することには不得手であった様である。楽曲そのものも「苦悩を経て歓喜に至る」ような構成をとっていて、その点に於ても「第10番」と言えるかも知れない。

全体は、第1楽章冒頭の序奏部に集約されていると言える。この序奏は全楽章の最後に作曲された部分であり、協和音とも不協和音とも聞き取れる響きが後に続く四つの楽章で解き明かされ、ついには第4楽章の第61小節の、まさに歓喜に至ったテーマに発展して行く。安定感あふれるこのテーマは、ハ長調で奏されていて、ベートーヴェンの「歓喜の歌」と酷似しているとの評を得ているが、どちらかというとこのテーマの方が落ち着いた感じを持っていて、祭り騒ぎしていないようである。ブラームス自身は、「同じように聞くのは愚かな人である。」とベートーヴェンと比べられることを避けていたようである。

(藤井部　勉)